
ポケットモンスター ジョウトに転生!?

ナンテコッタイ!!! <(^o^)>

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ジョウトに転生！？

【Nコード】

N2786Z

【作者名】

ナンテコツタイ！！！！<(^ o ^)>

【あらすじ】

神のミスで死んでしまったポケモン好きの高校生タクヤは、ジョウトに転生することになった。使用するポケモンは生前ゲームで使っていたポケモンで、家にはポケモンの転送装置まである。タクヤはジムを回ってリーグに出場しようしようと考えてる。

Prologue 転生前

「ん？ここはどこだ……？」

俺はタクヤ。ポケモンが好きな高校生だ。今俺は、真っ白な空間にいる。

タ「はあ、何にもねえな……。つて、誰アンタ！？」

そりゃ驚くよ、いきなり空から人が降ってきたんだから。

「私は神だ」

タ「ダメだ、ただの痛い人だ」

痛神「誰が痛い人だ！！つて、のところまで痛神ってされてるし！！だから、私は神だつて言っているだろうが」

タ「で、神（笑）が一体何のようですか？」

神「お前今、神の後に（笑）付けただろ。まあいい。お前には転生してもらおう」

俺は耳を疑った。は？俺死んだの？

神「そう。お前は私のミスで死んだのだ」フンス

タ「ちつたア悪びれるよ……」

神「だからせめてもの詫びとして、ポケモンの世界に転生してもらうことになった」

タ「あ、ああ。で、向こうに付いた時の手持ちは？地方は？」

神「お前、生前にポケモンしてただろ。手持ちとかのポケモンは生前にゲームで使っていたポケモンを使ってもらう。ボックスの代わりとして、転生後のお前の家になるところにでも転送装置を置いて

おこう。あと、ジヨウト地方だ」
タ「ありがとうございます」

実際に会えるのか、俺のポケモンたちに……

神「さて、ここでひとつだけ願いを叶えてやろう。何がいい？」
タ「うーん……俺が願えばそのポケモンは個体値が6Vになるとか？」

神「いいだろう。では、良い転生ライフを。お前のバツクの中に細かいことを書いた紙を入れておく」

タ「はい、ありがとうございます。って、うお!?!」

床に穴があいた。うわあ~~~~落ちる~~~~!!!!

タ「どうしてこうなった~~~~~~~~!?!」

Episode 1 目覚めると29番道路

タ「ん、んん？」

俺は目を覚ました。あのクソ神後で殺しちやる。で、ここはどこだ……？

タ「とりあえずバッグとかの確認をするか。っと、手持ちはっと」

腰にはボールホルスターがついていて、6個のモンスターボールがあった。

タ「えっと、こいつが色違いのテッカニンで、こいつがガブリアスか。これはハッサムで、これがゲンガーで、これはカイリキーで、最後にマルマインか……」

これはすべて俺が生前使っていたポケモンだ。特にお気に入りなテッカニン。ポケットに入れて色違いの陽気なツチニンを育てた。

タ「次はっと、これはポケギアで、こっちがトレーナーカードか……。どれどれ」

ポケギアのマップを確認すると、ここは29番道路というのが分かった。トレーナーカードを見ると、名前はタクヤで、6年前にトレーナーになったことになっている。しかしバッグは一個もなし。誰かと旅したいから言い訳を考えとかないといけない。

タ「で、これが図鑑で、バッグはこれか」

まず、図鑑の動作確認としてテッカニンを調べてみた。

テッカニン 忍ポケモン。ツチニンの進化系。鳴き声を聴き続けると、頭痛が収まらなくなる。見えないほどの速さで動く。

と、説明が流れた。

使える技は、虫食い、ひっかく、固くなる、吸血、すなかけ、乱れひっつき、心の眼、影分身、連続切り、嫌な音、剣の舞、切り裂く、高速移動、バトンタッチ、シザークロス

ちよいちよい、いつまで続くんだよ、オイ。

エアカッター、スピードスター、さわぐ、糸を吐く。

結局、テッカニンが覚える技の全てを覚えていた。

タ「オイオイ、覚えられる技が4つより多くても大丈夫だとしても、覚えられる技全部覚えているとは……」

次にバッグを探ると、いろいろな回復道具やドーピング用品の他に紙が一枚入っていた。

タ「なんだこの紙？何か書いてあるな、なにになに？」

タクヤへ

お前の家はポケギアのマップで確認しておけ。

今の手持ちはそれだが、そのほかのポケモンはお前の家で放し飼

いにされている。

お前の家になるところには、一人使用人を置いておいた。お前のいない間の家とポケモンの管理はその人に任せておけ。

では、良いトレーナーライフを。

神より

タ「神からの手紙か……。ま、とりあえずマップ確認しながら家に行くか」

とりあえずワカバタウンを目指すタクヤであった……

To Be Continued...

Episode 2 ワカバタウンと俺のポケモンたち

タ「っと、俺の家になるのはここか……」

どーも、タクヤです。つい先ほど転生してきた者です。

俺は今、ポケギアを確認しながら自宅に向かっているところです。
今、自宅を見つけました。

タ「まあ、入ってみるか……」

とりあえず門を開け、入ってみた。

？「おかえりなさいませ、タクヤ様」

タ「うおっ！！」

玄関のドアを開けると、そこにはメイドが迎えていた。そのメイドは、金髪ロングな髪型で、スタイルもかなりいい。かなり美人だ。

タ「ああ、アンタが例の神様が用意した使用人？」

メ「はい。神様から手紙を預かっています。こちらを」

タ「おお、サンキュー」

メイドからもらった、神様からの手紙を読んでみた。そこにはこんな内容が書かれていた。

タクヤへ

自宅についたらメイドが迎えていただろう？その娘がお前のメイドだ。

家の管理、お前の身の回りの世話は基本その娘がする。お前が

いない間のポケモンの世話や、ポケモンの転送などもしてくれるぞ。では本題だ。その娘には基本何してもいいぞ。むしろ何もしない方が損というものだろう。抱いても咎めないし、ほかの娘に変えて欲しいのなら変えてやる。さしずめ性欲 理役として使ってもいいということだ。

では良い性 生活をな……

神より

タ「ブツ！……！」

俺は吹き出してしまった。

メ「どうされました？」

タ「あ、アンタはこの手紙の内容知ってるのか？」

メ「ああ、 欲処理のことですか？」

タ「ブツ！……！そ、そうだよ。アンタはこれでいいのか？」

メ「タクヤ様のご命令とあらば」

タ「そ、そうか……」

メ「もしかして、今から抱きたいと仰りますか？」

タ「ち、違う違う！ちょっと確認しただけだ」

メ「そうですか。では、家の中を案内しましょう」

そう言われて、いろいろな部屋を見ていった。広すぎると思えるほどのリビングや、普通の家のリビングほどの広さもある俺の部屋。使用人の部屋などを見て回った。そして……

メ「こちらから、ポケモンが放し飼いにされている庭に出ることができます。セキュリティは万全で、おそらくロケット団如きが入ることはできないでしょう……」

タ「そうか……。おっ、アイツはカイリユーカーか。こっちはジュカ

インもいるな……。湖の方にはギャラドスやスターミーもいるな……。また手持ち変更の時は頼むわ」

メ「その説明ですが、まずは家の中に入りましょう」

俺たちは家の中に入り、リビングに来た。

メ「このパソコンが、転送装置です」

タ「へえ……」

そこにはさほど大きくはないが、そこまで小さいわけでもないデスクトップパソコンと、その横にUSBケーブルでつながれた、半球状のくぼみの付いた小さな機械があった。

メイドは半球状のくぼみの付いた機械を手にして言う。

メ「まず、放し飼いにされているポケモンをボールに戻し、この機械にセットします」

そう言うと、次に小さめのノートパソコンと、同じ半球状のくぼみの付いた小さな機械を取り出した。

メ「次に、同じくそちらでもボールをセットして、最後にパソコンでこのように操作すると転送されるのです」

タ「ちよつと待て、パソコンのバッテリーは？」

メ「それは神様の力を使って、永久電池にしてあるので大丈夫です。では、こちらのパソコンと転送装置を渡しておきます」

タ「それはそれでどうかと思うんだが……。ま、いいか。俺はとりあえず疲れたから寝るわ」

メ「私と一緒に？」

タ「『疲れたから』と言ったのが聞こえなかったか？お前と一緒に寝たら理性が持ちそうにないんだが……」

メ「冗談です。いつごろ起こせばいいでしょうか？」

このメイド、意外と茶目っ気があるようだ。それにしてもいつごろ起こしてもらおうかな……

タ「じゃあ、飯ができたらでいいよ。旅立つのは明日にする。ウツギ博士の研究所にも行きたいしな」

メ「了解しました。ではおやすみなさい」

タ「おう、おやすみ」

とりあえず俺は、自室に来た。

ベッドに寝転がり、さっきまでのことを振り返る。

タ「ふう、何かいろいろありすぎだな。美人のメイドさんといい、性欲処 役といい、精神的に疲れたよ……。ま、明日は旅立ちか……」

俺は目を閉じる。するとすぐに意識は眠りに落ちていった。

T O B e C o n t i n u e d . . .

Episode 3 ウツギ研究所と新人トレーナー

タ「はあ。昨日はいろいろありすぎて疲れた……」

ども、タクヤつす。昨日は散々でした。メイドに起こされて飯を食いに行ったら、メイドに「あーん」されそうになったし、風呂には突入してくるし……

タ「ま、今日から旅立ちだしな！強気で行くぜ」

そう。今日は旅立ちなのだ。

タ「そういえばジョウトではポケモンを一匹出しておくのが流行っているんだっけ？よし、出てこいハッサム」

ハ「ハッサム！……！」

タ「ハッサム、今日は旅立ちだから強気で行くぞ。今日からよろしくな」

ハ「サム、ハッサム！……！」

メ「おや？タクヤ様、もう行かれますか？」

タ「ああ。家のことは頼んだぞ？行くぞハッサム！」

ハ「ハッサム！……！」

メ「行ってらっしゃいませ、タクヤ様、ハッサム」

いよいよ旅立ちだ。新人トレーナーがいたら一緒に旅しようかな。いつそ鍛えてやるのか……

そんなことを考えているうちに、ウツギ研究所についた。そういうウツギ博士って研究中は周りのことが見えなくなるんじゃないかな。たっけ。

タ「ごめんくださいーい！」

ハ「ハッサム、ハッサム！」

「はい？どちら様？」

タ「どうも、トレーナーのタクヤです。こっちはハッサム」

ハ「ハッサム！」

タ「こちらの研究者さんですか？」

研「そうだよ。博士に用事？」

タ「まあ、トレーナーとして会って会っておきたいので」

研「そうか。じゃあ入って」

タ「失礼します」

研究所に入った俺たち。そこには新人用のポケモンである、チコリータ、ワニノコ、ヒノアラシと、それを見ているウツギ博士がいた。

タ「ウツギ博士」

ウ「ん？誰だい君は？」

タ「トレーナーのタクヤです。昨日ワカバタウンに引っ越してきたんです」

そう。俺の出身は一応カントーのタمامシシティになっている。

昨日引っ越してきたことになっているのだ。

ウ「そうか、君が引っ越してきたのか……。そのハッサムは君のかい？」

タ「そうです。ほらハッサム、挨拶しろ」

ハ「サムサム、ハッサム！」

ウ「ははは、元気がいいね。で今日はどいつた用事かい？」

タ「まあ、引越しの挨拶と、トレーナーとしてウツギ博士に会っておきたかったです。まあ、今日旅立ちの新人はいないかな？」

か考えてたりしますけど」

ウ「新人かい？それなら二人居るよ。一人はブリーダーを目指してるとか」

タ「マジすか？名前はなんですか？」

ウ「確か、コトネちゃんとカズナリ君だったかな」

マジか？あのシンオウに来てサトシたちと会ったアイツらか。

タ「俺も会ってみたいです。いいスか？」

ウ「もちろんだよ。先輩として色々教えてあげて欲しいし。そういえば君はジムを回ってるのかい？」

タ「俺は元々研究職に就きたかったからトレーナーになっただけですからジムは回ってないんです。でも最近実力を試したくなっただけ」

ウ「そうか。応援してるよ」

タ「はい。ありがとうございます」

そんな話をしてる間にハッサムはチコリータたちと遊んでいた。

ハ「サム、ハッサムハッサム、サム」

チ「チコ！」

ワ「ワニワニワニ！」

ヒ「ヒノー！」

ハ「サム」

仲良くなってるし……

ウ「図鑑は持っているかい？」

タ「自作のならこれを」

図鑑は自作ということにしてある。

ウ「自作！？君はすごいね!!！」
タ「いえいえ」

そんなことをしていると、新人トレーナーが来たようだ。

コ「こんにちは〜！」

マ「リルル〜」

カ「待つてよコトネ〜」

コ「カズナリ遅い！」

ウ「こんにちは、コトネちゃん、カズナリ君」

タ「こんにちは」

コ「こんにちは〜。この人は？」

タ「ああ、俺はタクヤ。昨日引越してきたトレーナーだよ」

カ「はあはあ。こんにちは、ウツギ博士。こちらの人は？」

ウ「昨日引越してきたタクヤ君だよ」

タ「で、そのチコリータたちと遊んでいるのが俺のポケモンのハツサムだ。ほらハツサム、挨拶だ」

ハ「ハツサム！サムサム、ハツサムー！」

コ「私はコトネで、こっちがマリル。よろしくって事ね、ハツサム
マ「リルル〜」

カ「僕はカズナリです。よろしくお願いします」

はあ、アニメに出てきたコトネとカズナリそのものだ。

ウ「じゃあ、新人トレーナー用のポケモンをあげるから、この三匹から選んでね」

タ「みんな頼りになるぞ」

コ「うーん、どの子にしようかな……」

カ「そうですね〜……」

かれこれ10分。悩んだ末に……

コ「じゃあ、私はチコリータにします。チコリータ、よろしくって事ね」

カ「じゃあ、僕はワニノコにします」

チ「チッコー!!!」

ワ「ワニワニ!!!」

ヒ「ヒノ〜……」

ハ「ハツサム、サム」

選ばれたチコリータとワニノコはとても喜んでいて、選ばれなくて落ち込んだヒノアラシをハツサムが慰めていた。

タ「そうだ。君たちの旅に俺もついてっていいか？」

カ「タクヤさんが？」

コ「勿論、いいて事ね」

チ「チッコー!!!」

ワ「ワニ〜!!!」

ハ「サムサム〜!!!」

タ「サンキュー。ハツサムもこいつらと仲がいいみたいだし、喜んでるよ」

ということ、俺たちは旅立つ

ウ「ちょっと待ってくれるかい？」

タ「何ですか？ウツギ博士」

ウ「タクヤ君にヒノアラシを貰って欲しいんだ」

タ「いいんですか？」

ウ「君のハッサムと仲良くなったみたいだし、引き離すのもかわいそうだからね。君だったら悪いようにはしないだろうし」
タ「ありがとうございます」

俺はバッグからパソコンと転送装置を出した。

ウ「何だいそれは？」

タ「自作の転送システムで家と繋げるんです」

ウ「それも自作？すごいね君は」

コ「ほんとにすごいって事ね」

タ「もしもし？」

メ「タクヤ様、どうされました？」

タ「早速手持ちの入れ替えだ。俺はそっちにカイリキーとマルマインを送る。そっちはバクフーンを送ってくれ」
メ「わかりました」

手持ちの入れ替えが終わった。

タ「よし改めて、ヒノアラシゲットだ！」

ハ「ハッサム！」

タ「よし、出てこいバクフーン！」

バ「バクッ！」

カ「うわー、バクフーンだ！」

タ「バクフーン、ヒノアラシの世話を頼む。ハッサムも協力してくれ」

バ「バク！」

ハ「ハッサム！」

バクフーンは背中にヒノアラシを乗せた。

カ「こう見ると親子みたいですね」

バ「バクバク！」

ヒ「ヒノー」

タ「もう仲良くなったみたいだな。じゃあ行くぞ、コトネ、カズナ
リ」

コ「うん！」

カ「はい！」

ハ「ハツサム！」

ウ「じゃあ気を付けてねー」

俺たちは研究所を後にした。

To Be Continued . . .

Episode 4 自己紹介 新人トレーナーコトネ&カスナリ

どうも、タクヤです。29番道路にきています。

タ「とりあえず改めて自己紹介しようか。まず俺から」

俺は一息置いて自己紹介を始める。

タ「俺はタクヤ。年は16だ。トレーナー歴6年で今年が7年目だ。俺はもともと研究職のほう希望だったからジムは回っていないが、実力を試したいから今年からジムを回る。敬語とか、そういうのはいいからな」

カ「よろしくお願いします」

コ「よろしくって事ね」

タ「で、手持ちのポケモンは、ここにバクフーンとハッサム、さっき貰ったヒノアラシだろ。であと三体はこいつらだ！」

俺は3つのボールを投げた。するとポケモンが出てくる。

タ「テツカニンとゲンガー、ガブリアスだ」

コ「すごい！テツカニンの色違い!？」

カ「ガブリアスも強そうですね！」

テ「テツカ!！」

ゲ「ガー!！」

ガ「ガアブツ!！」

次はコトネの番か……

コ「私はコトネ。こっちはマリル。で、さっき貰ったチコリータ。

よろしくって事ね」

マ「リルル〜」

ハ「ハツサム！」

チ「チコー！」

カ「僕はカズナリです。こっちがさっき貰ったワニノコ」

ワ「ワニワニ！」

タ（そーいや、俺が願えばポケモンの個体値が6Vになるように神に能力もらったんだっけ）

俺はチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシを6Vにすべく願う。

タ（チコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値を6Vにしる！）

そう願った。すると、頭に念話が届いた。

神「早速6Vの願いか……」

タ「神様！？」

神「願い、届いたぞ。今よりチコリータ、マリル、ワニノコ、ヒノアラシの個体値は6Vだ」

タ「サンキュー神様」

この念話の時間僅か0.01秒。

タ「まあよろしくな、コトネ、カズナリ」

コ「うん」

カ「はい」

タ「そーうだ、さっきもらったポケモンでバトルしようぜ」

コ「いいね、それ」

カ「はい」

タ「まず俺はコトネとする。カズナリ、審判頼む」
カ「わかりました」

俺はヒノアラシを呼び寄せ、肩に乗つけた。

カ「これより、カントー地方タママシティのタクヤ対ワカバタウ
ンのコトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体です」
タ「行くぜえヒノアラシ！」
ヒ「ヒノロー……！！！！！！」

「背中の炎が燃え上がった。

タ「まずは使える技の確認っと……」

ヒノアラシ 火鼠ポケモン。憶病で、いつも体を丸めている。襲わ
れると、背中の炎を燃え上がらせて身を守る。

使える技は 体当たり、煙幕、睨みつける、火の粉、火炎車、丸く
なる、スピードスター、火炎放射、転がる

やはり使える技の全てを覚えていた。しかし音量を小さくしてい
るので、二人は気づいていない。

コ「行くわよチコリータ！」
チ「チッコー！！」

チコリータとヒノアラシはにらみ合う。確かこいつは光の壁が使
えたな……。ソーラービームにも注意しないと。

タ「先行はそっちでいいぜ」

タ「さあ、これで終わりだ。丸くなるの後に転がる！」

ヒ「ヒノオーラー！」

チ「チコー。チコオ……」

コ「ああ、チコリータ！」

カ「チコリータ、戦闘不能。よって勝者、タمامシシティのタクヤ
！」

タ「よくやったぞヒノアラシ。バクフーン、お前も褒めてやれ」

バ「バクバク！」

ヒ「ヒノオノノ」

コ「さすが先輩トレーナーって事ね。大丈夫、チコリータ？」

チ「チコオ……」

タ「なあ、コトネ、カズナリ」

コ「何？」

カ「なんででしょう？」

タ「戦った相手のポケモンによって、能力の伸びが変わることって、
知ってるか？」

コ「エツ？」

カ「本当ですか？」

とりあえず、こいつらに努力値の理論を教えるでしょう。

タ「これは本当だ。例えば、攻撃を伸ばしたかったらオタチやワン
リキーなんかを倒すといい。スピードならビリリダマやポツポなん
かだ。特殊攻撃ならケーシヤゴース。防御ならイシツブテやグラ
イガーだ。特殊防御ならメノクラゲやバリアードだ。また、性格に
よっても伸びやすい能力、伸びにくい能力がある。陽気なら、特殊
攻撃は伸びにくいし、素早さが伸びやすいという具合だ。これは俺
が研究した」

もちろん嘘だ。ただの現実世界の廃人知識だ。

タ「見た感じワニノコは生意気で、チコリータは真面目、マリルは
やんちゃって感じだろ？生意気な性格は特殊防御が伸びやすく、素
早さが伸びにくい。真面目は平均的に伸びる。やんちゃは攻撃が伸
びやすく特殊防御が伸びにくいんだ」

ヒノアラシはさしずめ無邪気つてところだろう。この世界では物
理技も使うからちょうど良く二刀流にすることにした。

タ「だから、これを踏まえて修行すれば、絶対に強くなれる」

コ「ありがとう」

カ「勉強になりました」

タ「とにかく、傷ついたチコリータはボールに戻して、ヨシノシテ
イのポケモンセンターを指そうぜ」

コ「うん」

カ「はい」

また俺はヒノアラシをバクフーンの背中にのせ、ハッサム、バク
フーンと共に歩きだした。目指すはヨシノシティ！

To Be Continued . . .

Setup 1 タクヤ

〈名前〉

タクヤ

〈姿、服装〉

髪型のイメージは生徒会の一存の杉崎鍵

顔は基本的に糸目だが、ここぞというときには目を見開く

細身の黒いフレームのメガネをかけている

身長は178cmくらい

服装はグレーのズボンに空色のYシャツで、上にコートまたはグレーのパーカーを着ている

また、偶にだがスーツを着ることがある

〈人物〉

基本的に仲間や友人、他人には優しいが、自分の気に入らない行動をする人や、敵には容赦をしない

怒ると物凄く怖い

ポケモン廃人

〈ポケモン〉

転生時の手持ちは色違いのテッカニン、ガブリアス、ゲンガー、ハッサム、カイリキー、マルマイン

自宅にはたくさんのポケモンがいる

Episode 5 ポケモンセンターとコトネの初ゲット

タ「ここがヨシノシティか……」

ども、タクヤです。ただいまヨシノシティに来ております。

タ「おい、コトネ、カズナリー！ポケモンセンター行くぞー！」
コ「待ってー！」

カ「待ってくださーい！」

俺たちはポケモンセンターに来た。まずはポケモンの回復をしないとな……

タ「ほら、回復してもらうぞ。戻れハッサム、バクフーン、ヒノアラシ」

コ「あつ、私も」

カ「僕も」

タ「ジョーイさん、どのくらいで回復は終わりますか？」

ジ「一時間くらいです。そういえば、ジョウトリーグの出場受付はしましたか？」

タ「あつ、まだです。はい、トレーナーカードと図鑑。お願いします。コトネ、カズナリー、お前らはリーグ出場しないのか？」

コ「カズナリーはしないけど私はするって事ね。図鑑とトレーナーカード、お願いします」

ジ「はい、わかりました」

数分後、受付を終えたのか、ジョーイさんが戻ってくる。

ジ「はい、終わりました。では、頑張ってジムバッジを8つ全て集

めてください」

タ「はい。ありがとうございます」

コ「ありがとうございます」

タ「ああ、カズナリはどうするんだ？」

カ「僕はリーダーを目指しているので」

タ「そか」

うーん、これからどこで時間を潰そう……

タ「そうだ！コトネ、カズナリ、西の海岸で釣りしようぜ」

コ「釣り？」

カ「いいですね。しましうよ」

タ「おう」

俺たちは海岸へ向かった。さて、何が釣れるか……

タ「まず、コトネは女の子だからこの軽いやつにしておこうか」

コ「ありがとうございますね」

タ「カズナリも非力そうだからこれかな？」

カ「非力って……」

タ「で、俺はこれで。餌はこれを自由に使っいいい」

と言っで、神様からもらったバッグに入っていたポケモンフーズを差し出した。

タ「じゃ、俺から行くぜ！」

俺が海に糸を垂らす。すると二人も順に垂らしていった。

十分後

暇だ。釣れない。

タ「何も釣れねえ……」

そんなことをつぶやいた直後、コトネの釣竿がクイツ、と引っ張られた。これは大きいな。

コ「ちよっ、一人じゃ無理！」

タ「緊急事態だ！マルマインを送れ！」

メ「了解しました」

タ「よっしゃあ！来い、マルマイン！」

マ『マルン！マルルルルン！』

タ「マルマイン、少しの間コトネの言うことを聞いてくれ！」

マ『マルマルン！マルン！』

タ「コトネ、俺のマルマインを使え！」

コ「ありがとうって事ね！技は！？」

タ「多分お前の思いついた技はたいてい覚えてるぞ！適当に弱らせろ！」

コ「わかった！マルマイン、10万ボルト！」

マ『マルルルルル！！！』

キ『ゴキゴキ！！！！』

キングラーは10万ボルトが直撃し、仰け反ったが体制を立て直してハサミを構えた。

タ「来るぞ、クラブハンマーだ！マルマインは素早いからよけられるはずだ」

コ「マルマイン！避けてから転がる！」

キ『ゴキ！ゴキゴキッ！！！』

マ『マル！マルルル！』

キ『ゴキッ！』

コ「マルマイン！電磁波！」

マ『マルルルルルルルル』

キ『ゴ、ゴキ……ゴ……キ』

タ「今だ、コトネ！」

コ「行けっ、モンスターボール！」

キングラーはボールに収まり、スイッチが点滅し、揺れ始めた。

一回。二回。三回。パチンツという音が鳴った。

コ「キングラー、ゲットって事ね！」

カ「やったじゃないかコトネ！」

タ「スゲエぞコトネ」

コ「そんなに褒められると照れるって事ね」

マ『マル、マルルルン』

タ「コトネのサポート、サンキューなマルマイン」

マ『マルルン』

タ「じゃあ戻れ、マルマイン」

俺はマルマインをボールに戻し、転送した。

タ「そうだコトネ、キングラーを出してくれ」

コ「わかった。出てきてキングラー！」

キ『ゴキ……ゴキ……キ』

タ「やっぱ傷ついてるな。えっと、こうしてこうして」と

俺はキングラーの処置をした。

タ「はい、終わり」

カ「すごいですねー。リーダーとして見習わないと」

キ『ゴキツ！ゴキゴキツ』

タ「そろそろポケモンセンターで治療も終わったんじゃないか？」

コ「そういえば忘れてた。行こうって事ね」

カ「そうだね」

俺たちはまたポケモンセンターに向かっていった。

To Be Continued...

Episode 6 キングラーの初バトル!? 高速蟹の恐怖!!

タ「ジョーイさん、回復終わりましたか？」

ジ「はい、終わりましたよ。あら？そのキングラーさつき捕まえたの？」

コ「そういう事ね」

キ『ゴキゴキ』

カ「手持ちがない状態が出てきたので大変でした」

タ「だな」

ジ「君たち、最初のジムのことなんだけど、ここから北北西に最初のジムの街、キキョウシティがあるわ」

タ「マジすか？ありがとうございます」

ジ「頑張ってくださいね？」

コ「頑張るって事ね、キングラー」

キ『ゴキッ！ゴキゴキッ！』

俺たちは最初のジムの街、キキョウシティへ向かうため、ポケモンセンターを後にした。

タ「ここは30番道路だな……」

コ「キキョウシティはどのくらい先にあるの？」

カ「この本によると、結構歩くみたいだよ」

タ「ま、歩くのも旅の醍醐味だ」

？「ちよつといいかい？」

俺たちはキキョウシティを目指して歩いていると、誰かが話しかけてきた。

タ「誰だい？」

シ「僕はシユウ。この中の誰か、僕と勝負してくれないか？」
タ「勝負か……。コトネ、お前がしたらどうだ？」
コ「えっ、私!? 別にいいけど……」
タ「よし決まりだ。カズナリ、審判な」
カ「はい」

シユウとコトネの勝負が決まり、ちょっとした広場に向かう俺達。

カ「これより、コトネ対シユウのポケモンバトルを始めます! お互い使用ポケモンは一体! どちらかが先に戦闘不能になったとき、負けとします! なお、道具の使用は認められません!」
コ「じゃあ私から行くわ! 行けっ、キングラー!」
キ「ゴキゴキッ!」

タ「ほう、キングラーの初バトルか……。あ、そうだ6V6V」

俺はキングラーを6Vにしると願った。これでキングラーは6Vだ。

タ「さて、シユウとやらは何を出してくるか……」
シ「相手はキングラーか……。それなら、行けっスピアー!」
ス「スピスピ!」
タ「スピアーか……。こりゃあスピードが厄介だぞ……」
コ「スピアーか……」

コトネは図鑑を取り出し、スピアーと、キングラーの技を調べた。

スピアー 毒蜂ポケモン。コクーンの進化系。どんな相手でも強力な毒針で仕留めてしまう。偶に集団で襲ってくる。

キングラー 使える技は、高速移動、怪力、馬鹿力、剣の舞、クラ

か上にキングラーがいて、そのまま高速落下して怪力を決めた。

ス「スッ!? スパイイイイイイイイイイツツ!!!!!!!!!!!!!!」
シ「スパア、かわせっ!かわすんだ」

シュウの叫びも虚しく、キングラーの高速かつ強力な一撃で勝負は決した。

タ「……こんな戦い方も、あるんだな……」

そんな小さなタクヤの呟きが、虚空に消えた。

ス「……ス……スピ……スピア……」

カ「スパア、戦闘不能! よって勝者、コトネ!」

タ「すごかったぞ、コトネ」

コ「やったあ!!!!!!」

シ「ありがとう、コトネ。君のキングラー、すごかったよ」

コ「ありがとう、シュウ」

シ「まさか、キングラーが飛翔とぶとは思わなかったよ」

カ「僕も、目を疑いました」

これ以来このバトルは、俺の記憶の中で、「高速蟹の恐怖」と名付けられた。

次に向かうはキキョウシティ!

To Be Continued...

Episode 7 キキョウシティ マダツボミの塔のオバケ騒動!!

タ「ついでに、ここがキキョウシティだ」

どーも、タクヤです。俺たちは今、やっとキキョウシティにつき
ました。

タ「こんばんは、ジョーイさん」

そう、「こんばんは」ということからわかるように、ついたのは
夜だった。

ジ「はい、こんばんは」

コ「あれ？ジョーイさんさっきまでヨシノシティにいませんでした
か？」

ああ、アニメポケモンのあの設定知らないのか……

タ「コトネ、カズナリ、これを見る」

コ「えっ!？」

カ「これって!？」

俺が見せたのはガイドブックのようなものだ。つまり……

コ「カ「みんな同じ顔!?!？」

タ「そ。全国のジョーイさんは全員がそっくりで、しかも何らかの
繋がりがあるんだ。ああ、ジュンサーさんも同じだぞ」

カ「それは知りませんでした……」

コ「すごいって事ね」

タ「ま、それはそうとして、ポケモンの回復お願いします。あと、部屋はあいてますか？」

ジ「はい、お預かりします。部屋は二人部屋が一部屋だけならあいてますよ」

タ「そつすか。じゃあそことつておきます」

ジ「はい」

コ「二人部屋つて、一人どうするの？」

カ「まさか野宿するんじゃない？」

タ「バカ言え。俺はソファとかで寝るからベッド使え」

コ「それはタクヤに悪いよ」

カ「そうですね。タクヤさんがベッド使ってください」

タ「人の好意は素直に受け取るもんだぞ？」

カ「わかりました。ありがたく使わせてもらいます」

コ「ありがとう、タクヤ」ニコッ

タ「お、おう。どういたしまして。じゃ、じゃあおやすみ／＼」

俺たちは眠りにつき、朝を迎えた。

タ「よし！ジム行くぞ！」

コ「おー！」

カ「頑張ってください！」

タ「おう！」

俺たちはジムに行き、ジム戦の予約をしようとしたのだが……

受付「お二人はマダツボミの塔には行かれましたか？そこでお坊さんのお師匠様に勝たなければジム戦は認められません」

タ（ヤベツ、忘れてた）

コ「そんな〜」

カ「ま、まあ行けばいいじゃないか」

受「それはそうと、こんな噂を知っていますか？」
タ「コ、カ「噂？」

受「なんでもマダツボミの塔は夜に登ると、オバケが出るそうですよ」

カ「お、オバケ〜!？」

タ「面白そうじゃん。どうせなら夜に行こうぜ! (どうせオバケの正体はゴースなんだし、こいつらのどちらかに捕まえさせたいし)」
カ「え〜!？」

コ「あ〜、カズナリ怖いんだ〜」

タ「ま、いいや。さつさと夜まで時間潰そうぜ」

カ「そ、そんな〜……」

俺たちは夜まで時間を潰し、マダツボミの塔に来た。

タ「よし、来たぞマダツボミの塔!」

コ「じ、実際に見ると結構雰囲気あるって事ね……」

カ「もうやめましようよ〜」

タ「よし、いくぞ〜!」

俺は二人に有無を言わずマダツボミの塔に入った。

タ「ま、一応ポケモン出しとくか。出てこいテッカニン!」

テ「テッカ!」

コ「うっ、マリル〜」

マ「リルル〜!」

カ「気絶中 俺が引っ張ってる

うーん、何もなし。

と、そのとき……

ゴCゴスゴス、ゴース!!!」
コ「ゴースと分かれれば怖くないって事ね。マリル、水鉄砲!」
マ「リイ、ルウウウウウウ!!!」
ゴCゴ?ゴオオオオオオオオオ!!!」

さらにもう一体のゴースは水鉄砲で場外に吹っ飛ばされた。

カ「ワニノコ、お願いしますね!」
ワ「ワニワー!!!」

カ「噛み付く!」

ワ「ワニっ!」

ゴ「ゴ!?ゴ……ース」

カ「今です!モンスターボール!」

カズナリはモンスターボールを投げた。スイッチ部分が点滅し、ボールが揺れる。数回揺れたところで、パチンツ!という音が鳴った。

カ「ゴース、ゲットです!」

ワ「ワニワニワー!!!」

タ「良かったな、カズナリ」

コ「そうね」

タ「じゃ、お坊さんのお師匠様に会いに行こうか」

カ「はい!」

コ「うん!」

テ「テツカ!」

ワ「ワニっ!」

マ「リルウ」

こうして、ゴースをゲットしたカズナリ。次に目指すは、マダツ

ボミの塔の頂上。

T
O
B
E
C
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.

Episode 8 マダツボミとお師匠様!!

タ「ふう、やっと頂上か……」

コ「高いつて事ね……」

カ「疲れた……」

マ『リルル』

ここはマダツボミの塔の頂上。あれがお坊さんのお師匠様だろう。ここまでくるのは大変だった。ゴースが他にもいて、カズナリのゴースに説得を任せたり、お坊さんが立ちはだかったり。

タ「貴方がここのお坊さんのお師匠様、ですね？」

師「いかにも。こんな夜更けに、お主らはわしに挑戦するのか？」

タ「はい」

コ「私もです」

師「よからう。ではまずそちらの少年、バトルを始めようか」

タ「はい！」

坊「では、ただいまより、お師匠様対挑戦者のタクヤのバトルを始めます！お互い使用ポケモンは三体！先にすべてのポケモンを失ったものの負けとします！」

タ「行くぜヒノアラシ！」

ヒ『ヒノヒノオー!!』

師「行きなさいマダツボミ！」

マダ『マダツボ』

坊「それでは、始め！」

師「こちらから行かせていただく。マダツボミ、ツルの鞭！」

マダ『マダマダ』

ツルの鞭がヒノアラシに襲いかかる。

タ「ヒノアラシ、バックスステップで交わしてジャンプ！そこからフィールド全体に火炎放射！」
ヒ「ヒノツ、ヒノツ、ヒノツ！ヒノツツツ！！！！ヒイイイ、ノオオオオオオオオ！！！！！」

フィールド全体を炎が包む。そこに居たのは黒焦げになって倒れているマダツボミだった。

坊「マダツボミ、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」

タ「よくやったぞヒノアラシ。もう一回頼む」

ヒ「ヒノツ」

師「ほう。お主なかなかやりおるな。ポケモンへの気遣いも忘れな。良いトレーナーじゃな。次は、ウツドン！行きなさい！」

ウ「ウツドン……」

タ「ありや、進化系か」

コ「あれがウツドン。さすがお師匠様。持つてるポケモンが違うって事ね」

ウツドン　ハエ取りポケモン。マダツボミの進化系。体内では強力な溶解液を精製しているが、それを分解する物質も精製しているので　自分は　溶けたり　しない。

タ「相手にとて不足なし！ヒノアラシ、穴を掘る！」

ヒ「ヒノヒノツ！！！」

師「ウツドン、地面の揺れを感じるんじゃない」
ウ「ウツツドン！」

カタ、カタ、と地面が揺れる。だが……

師「ウツドン、そこじゃ！ソーラービーム！」
ウ「ウツドオオオオオオオン！！！！！」
タ「フツ。ヒノアラシ、噴火！」
ヒ「ヒノオオオ！」

揺れたのはダミー。後ろではなくしたから噴火を繰り返した。これだけでウツドンは戦闘不能になる。

師「まさか、ここまでとは」
坊「ウツドン、戦闘不能！ヒノアラシの勝ち！」
師「では、こちらを倒せるかな？来い、ヨルノズク！！！」
ヨ「クルルルル！！！」
カ「ヨルノズクですか！？」
タ「まだ行けるな、ヒノアラシ？」
ヒ「ヒノッ！」

そのとき、ヒノアラシの体が光に包まれた。

コ「あの光は！！！」
カ「進化ですか！？」
タ「進化か……」
マグ「マゲッ！！！」
師「お主のヒノアラシ、進化したか……。ヨルノズク、ゴッドバード！」
ヨ「クルルルルル！！！」

ヨルノズクの体が淡く発光する。進化の光とは違う、淡い光が。

タ「マゲマラシ、スピードスター！」
マグ「マゲウ！！！」

ヨ「クルツ!?クルルルルル!」

マグマラシの星形の光線がヨルノズク目掛けて飛んでいく。だが、ヨルノズクもゴッドバードの溜めを終え、突進してくる。

師「ヨルノズク、ゴッドバードの起動を変えてマグマラシに攻撃しなさい!」

ヨ「クルルル!クルツ、クルツポー!!!」

マグ「マグマツ!?マグウ、マグッ!」

マグマラシはモロにゴッドバードを受けてしまったが、無理やり軌道修正されたゴッドバードは威力もない。

タ「マグマラシ、火炎放射でフィニッシュ!」

マグ「マア、グウウウウウ!!!」

ヨ「クルツ!?クル……ルルル……ル……」

坊「ヨルノズク、戦闘不能、マグマラシの勝ち!よって勝者、挑戦者タクヤ!!!」

タ「やったぜ!マグマラシ、ありがとう!!!」

マグ「マグマグッ」

コ「タクヤ、すごいって事ね!」

カ「素晴らしいバトルでした!」

師「戻れ、ヨルノズク!ゆっくり休め。いやあ、お主タクヤと言っただな?素晴らしいバトルじゃった。良いトレーナーを目指せよ?」
タ「はいっ!」

お師匠様に勝ったタクヤ。コトネも同じくバトルしたが、チコリータ、マリルが戦闘不能になりながらも、「高速蟹の恐怖」の再来で勝った。いよいよ明日はキキョウジムだ!!!

T
O
B
E
C
O
N
T
I
N
U
E
D
.
.
.

Episode 9 初ジムバトル!! タクヤvsハヤト!!

タ「すみません、ジム戦しに来ました」

ハヤ「挑戦者は君かい？俺はジムリーダーのハヤト。鳥ポケモン使
いさ」

タ「ハヤトさん、ジム戦は俺だけじゃなくて、後ろのコトネもです」

コ「私もお願いします」

ハヤ「そうか。じゃあどちらから先にする？」

タ「俺から行きましょう」

ハヤ「そうか。じゃあバトルフィールドの方に行こうか」

タ「はい」

バトルフィールドに移動した俺たち。鳥ポケモンは飛べるから気を付けないとな。

コ「頑張ってる事ね」

カ「頑張ってください、タクヤさん」

タ「おうよ」

ハヤ「それじゃあはじめようか」

いよいよ初のジムバトル。楽しみだな。

審「これより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者、タマムシシティの
タクヤのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。道具の使
用は認められません」

タ「本気でいきますよ？」

ハヤ「ああ、本気で来い！」

タ「行けっ、ハツサム！」

ハ「ハツサム!!!」

ハヤ「君のポケモンはハッサムか。それなら、行け、ピジヨット！」
ピ「ピジョー……ッッッ！！！！！」

コ「あれがピジヨット……」
カ「すごく強そうですね」

カズナリはポケモン図鑑を取り出し、検索した。

ピジヨット 鳥ポケモン。ピジョンの進化系。発達した 胸の 筋
肉は、軽く 翔いただけで 大風を 起こせるほどである。

審「先行は挑戦者から。^{チャレンジャー} それでは、バトルスタート！！」

タ「いくぜハッサム！！高速移動からの影分身！！」

ハ「ハッサム！ハッサムハッサム！！！」

コ「タクヤのハッサム、すごく速い。それに分身の数もすごい」

カ「さすがタクヤさんのポケモン。よく育てられているよ」

ピ「ピジヨット？ピジヨット、ピジヨット！」

ハヤ「落ち着けピジヨット！分身をすべて巻き込むように風おこし
！！！」

ピ「ピジョー……ッッッ！！！！！」

タ「甘い！ハッサム、飛翔！！」

ハ「ハッサム！！！！！！！」

ハッサムは高速で羽を翔かせ、飛翔した。

タ「行くぜ！バレットパンチからの燕返し！！！！！」

ハ「ハッサム！ハッサムハッサム！！！」

ハヤ「速い！？ピジヨット、よける！！」

タ「もう遅い！ハッサム！」

ハ「ハッサム！！！！ハッサ、ハッサ、ハッサム！！！！！」

タ「ハヤ」うおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお！……………！」

ピ「ピジョー……………ツツツツツツツ……………！」
ハ「ハツサ、ハツサム……………！」

ズドオオオオオオン……………！と大きな爆発が巻き起こる。爆
風による気振りが消えたとき、そこに立っていたのは……………

ピ「ピジョツ……………」

ハ「ハツサ……………」

なんと両方立っていた。どちらもキツそうだ。

ハヤ「次で決まりそうだね」

タ「そうですね」

ハヤ「じゃあ行くぞピジョツ、翼で打つ！」

た「ハツサム、バレットパンチ！」

ハ「ハツサムツツ……………！」

ピ「ピジョツ！ピ……………ジョ……………」

技を出そうと、ピジョツが構えたところで倒れてしまった。

審「ピジョツ、戦闘不能。ハツサムの勝ち。よって勝者、チャレンジャー挑戦者

タ「タママシシテイのタクヤ」

タ「よっしゃ……………！勝ったぞハツサム……………！」

ハ「ハツサム……………！ハツサムハツサム……………！」

俺はハツサムに抱きついた。

タ「ありがとうハツサム」

ハ『ハッサム!』

ハヤ「戻れピジョット。よく頑張ったな。おめでとう、タクヤ君。これは勝者の証、ウイングバッジだ。貰ってくれ」

タ「よっしゃ! ウイングバッジ、ゲット!!!」

ハ『ハッサム!!!』

コ「タクヤ、おめでとうって事ね!」

カ「おめでとうございます、タクヤさん」

タ「ああ、ありがとう。コトネ、次はいよいよお前のジム戦だ。はじめてのジム戦頑張れよ!!!」

コ「うん!」

ハヤ「そしたら、ポケモンを回復したらすぐにはじめようか」

コ「はい! お願いします、ハヤトさん」

ハヤトとのジム戦に勝利することができたタクヤ。次はいよいよコトネのジム戦。コトネはハヤトに勝つことができるのか。

To Be Continued . . .

Episode 10 コトネのジムバトルと繋がりのお窟

ハヤ「コトネちゃん、回復も終わったからすぐにジム戦を始めようか」

コ「よしっ、頑張るって事ね」

カ「頑張れ、コトネ」

タ「俺も応援してるぜ」

ここはキキヨウシティポケモンセンター。キキヨウシティジムリーダー、ハヤトのポケモンの回復も終わり、ついにコトネの初ジムバトルが始まるうとしていた。

審「ではこれより、ジムリーダーのハヤト対挑戦者コトネのバトルを始めます。お互い使用ポケモンは一体。ポケモンが先に倒れたほうが負けとなります。なお、道具の使用は認められません」

ハヤ「タクヤ君には負けただけど、次はそうはいかないよ！行けっ、ピジョット！」

ピ「ピジョー！ツッ！！」

コ「だつたら私も本気で行くって事ね。出てきて、マリル！！」
マ「リルル〜」

審「それでは、バトルスタート！」

コ「マリル、水鉄砲！」

マ「リイ、ルーーーーー！！」

ハヤ「かわして翼で打つ！」

ピ「ピジョー！ツッ！！」

コ「マリル、ジャンプ！そこから体当たり！」

マ「リルツ！リルーーーーッ！！」

ピ「ピジョット！？ピジョー！ツッ！！」

トネ」

コ「やったー！ー！！！」

タ「スゲエぞコトネ！」

カ「やりましたね、コトネ！」

ハヤ「タクヤ君とのバトルの間にブレイブバードの弱点を見抜かれたのかな？」

コ「はい。急に止まれないからその先に攻撃を展開しておけば勝手に突っ込んでくると思っただんです！」

ハヤ「何はともあれ、勝者の証のウイングバッジだ！」

コ「ウイングバッジ、ゲットって事ね！」

マ「リルル〜」

ジム戦を終えたタクヤ一行は、ヒワダタウンにつながる繋がり洞窟に来ていた。

タ「今日は何曜日だったけ？」

コ「多分金曜日だったはずよ」

カ「それがどうしたんですか？」

タ「いやー、保護されてるんだけど、ここは金曜日だけラプラスが見られるんだ」

コ「ラプラス!?!」

ラプラス 乗り物ポケモン。優しい 心の 持ち主。めったに 争わないため、沢山 捕まえられ 数が 減った。

カ「ラプラスって、絶滅危惧のポケモンですよね？」

タ「ああ。まあ、俺持つてるけど」

コ「ええっ!?!どうして？」

タ「まあ、研究職目指してるって言っただろ？その度の時にラプラス保護区に行ったんだけど、管理人と仲良くなってさ、卵をもらっ

「ただ」

コ「いいな、ラプラス」

カ「せめて見に行きましょうよ」

タ「そだな」

つながりの洞窟を通るタクヤたちは、ラプラスを見に行くことになった。目指すは繋がり洞窟の最下層！

To Be Continued . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2786z/>

ポケットモンスター ジョウトに転生!?

2011年12月14日21時47分発行